

穴太衆

大津市北部に位置する坂本地区には、古めかしく荒々しい石垣が多く見られ、風景に溶け込んでいます。日吉大社をはじめ、比叡山山頂の延暦寺に至るまで、地元の霊場にも同様の石垣が見られます。これらの石垣は、坂本の近くに住んでいた穴太衆と呼ばれる人々の遺産です。穴太衆は民族ではなく、石工の一族であり、その知識を世代から世代へと受け継いでいました。

穴太衆は当初、日吉大社で基礎や擁壁を作っていました。延暦寺が坂本に老僧のための里坊を建てるようになると、穴太衆の職人が石工を担当し、現在の特徴的な町並みになりました。1571年に武将の織田信長（1534～1582年）が延暦寺を包囲した際には、寺が炎に包まれても、穴太衆が作った石垣は崩れなかったと信長の部下が報告しています。1576年、信長は琵琶湖東岸の安土城の基礎工事を穴太衆に依頼し、他の武将たちが穴太衆の石工に注目するきっかけになりました。

一般的な石工とは異なり、穴太衆は石垣を固めるためにモルタルなどの接着剤を使用しません。穴太衆はまた、石の形を整えたり削ったりする代わりに、天然の石を選び、パズルのように積み上げていきます。そのため、大小の石が混在し、隙間が多く、独特の風合いを醸し出しています。石の位置を間違えてしまうと、壁全体を作り直すことになってしまうので、石を最適な場所に配置することが重要です。このような細かい判断をするために、穴太衆は使うべき場所を石から「聞き取る」ことができればならないとされています。

今日、伝統的な技術を駆使する穴太衆の会社が一つだけ残っていますが、それぞれの石にはラベルが付けられています。同社は坂本から九州の熊本城まで、全国各地の歴史遺産の復興に取り組んでいます。